

コロナ時代の 仕事論

一橋大教授 楠木建氏

仕事にはコントロールできるところとできないところがあり、コントロールできないことを無理やりコントロールしようとするとロクなことにならない。だとすると、ここから2つのポイントが見えてくる。

第1に、何をどこまでコントロールできると考えるか。仕事の中身やそれを取り巻く状況、能力や持ち味に合わせて、どこまでコントロールでき、どこを所与の条件として受け入れるか。この見極めに個性や仕事のセンスが如実に表れる。仕事上での重要な成長のひとつは、見極めが早く的確になるということ。自分でコントロールできると自信を持てる領分が大きくなることもまた成長である。

第2に、仕事ではその人に固有の哲学が問われる。仕事はお客(自分以外の他

絶対悲観主義の勧め

者)に対する価値提供に他 った人には負け方が実にキならない。ところがお客さ レイな人がいる。僕はこうんばかりはコントロールが いう人を信用する。「負け利かない。哲学がものを言 戦、ニヤリと笑って受け止るのは、コントロールでき める」。これが本当のプロ ないことに直面したとき だ。

絶対悲観主義が優れているのはその運用が著しくシ だ。僕の仕事哲学を一言でい るのはその運用が著しくシ こと「絶対悲観主義」。物 ンブルなこと。やるべき 事が自分の思い通りにうま とは、マインドセットのツ くいくという期待をなすべ マミを悲観方向に回してお く持たないようにする。何 くだだけ。事前に成功を前提 事においても「ま、うまく とするからリスクを感じる いかないだろうな……」で のであり、絶対悲観主義に も、ちよつとやってみる 立てばリスクから解放され か」と構えておく。こう る。主観的にはリスクがな いうマインドセットを絶対 いからフルスイングでき 悲観主義と呼んでいる。で、 だいたい空振りす ベルナル・フォントネ る。それでもバットを振ら ル(フランスの思想家)は ないことには始まらない。 うまいこという。「幸福の 邪魔になるのはプライド もっとも大きな障害は、過 だ。プライドは大切だが、 大な幸福を期待すること 出 それはある程度の成果を出 ある」。これだけ多くの人 し実績を積んでからの話。 がそれなりに利害をかかえ 「自分はまた何者でもない」 自由意思で動いている。自 という認識からスタートす 分の思い通りにならないの るに越したことはない。若 が当たり前で、思い通りに 者にこそ絶対悲観主義の構 なることがあったとしたら えを勧めたい。気軽にフル それは例外だ。 スイングし、どんどん空振 いくら経験を重ねても勝 りする。若者の特権は「こ 率をたいして上がらない。 れから先が長くある」では それでも負け方は確実にう なく「まだ何にもない」と まくなっていく。年季の入 いうことにある。